

[シリーズ・学校教育]

「健康と適応」のための学校予防教育の革新
— 劇場型授業 TOP SELF の挑戦 —

山崎勝之 (鳴門教育大学 予防教育科学教育研究センター所長)

子どもの健康や適応上の諸問題は、なかなか解決の糸口がつかめない。いじめや不登校は相変わらず多いし、生活習慣病予備軍の増加やうつ病にかかる子どもも珍しくなくなってきた。こうした状況の中、健康や適応のために、ユニバーサル(一次的)な予防の必要性が叫ばれている。ユニバーサル予防とは、問題が起きないうちにすべての子どもを対象に行う予防である。

しかし、問題が起きる前の予防にはなかなか本腰になれないようで、その試みはまったく軌道に乗っていない現状がある。このような中、徳島県にある鳴門教育大学の予防教育科学教育研究センターが本気でこのことに取り組み始めている。センターは昨年1月に設立されたばかりであるが、はやくも今年4月、文部科学省から5年にわたる計画で多額の概算要求予算を得て、あらたに専属のスタッフも9名加わり、熱い活動を展開している。

このセンターが目指すところは、一言でいえば、子どもの健康と適応を守るユニバーサル予防教育を、広範囲の小中学校において、ほぼすべての学年で年間を通して継続実施することである。これはまた、エビデンス(科学的根拠)に基づいた教育にもなる。これまで、この種の教育は、単発的、また限定された学校で細々と行われるばかり

で、このような包括的な試みは過去には例がなく、今後の展開が期待される。

このセンターは、このような大規模なプロジェクトがひとり鳴門教育大学だけで首尾良く遂行できないことを十分に承知し、内外の研究者や教育者と十分な連携体制を確立している。今年度も、海外の学会でのシンポジウム主催や海外施設の視察をはじめ、日本においても大阪で9月と11月の2回、アメリカ、イギリス、オーストラリア、中国等、総勢7名の研究者を招聘して国際カンファレンスの開催が予定され(一部実施済み)、現在11月分の参加者を募集している。このセンターが行う教育は、TOP SELF『いのちと友情』の学校予防教育(Trial Of Prevention School Education for Life and Friendship)と呼ばれ、春から新聞紙上でも紹介され、すでに気づかれた向きも多いだろう。

このTOP SELFの特徴は、①教育の目標と方法がエビデンスに支えられていること、②すべての子どもを惹きつける教育方法が考案されていること、③評価は教育であるという主張を全面に出し、よい側面を強調した評価を子ども自身に戻していること等である。TOP SELFの規模は大きく、ベース総合教育とオプション教育から構成されるこの教育は、小中学校のほとんどすべての学

年で一年中実施できるプログラムの構成と内容をもつ。ベース総合教育は、子どもの健康と適応を総合的に守り、問題を予防する教育で、常時適用される。オプション教育は、学校のニーズに合わせて適用され、特定の問題に特化した教育である。そこでは、いじめ、暴力、非行、ストレス、うつ病、性関連問題、喫煙、薬物乱用等、10にも及ぶプログラムが用意されている。

こうして、上述のように、TOP SELFの目指すところは、学校においてすべての子どもに恒常的に適用されることになる。そもそも健康や適応の問題の予防は一筋縄ではいかず、性根を据えてかかる必要がある。日本におけるこれまでのこの種の予防教育は、ある学年に数回適用される、多くても数ヶ月適用されるという規模の小さいものであった。そのような小規模、一過性の適用では

問題は解決されない。それほどに、健康と適応を脅かすおおもとの原因の発達上の形成過程は根深いものがある。

この教育の開発と実践が始まってまだ半年。この間着実に成果をあげつつあり、また同時に多くの障壁や問題にも遭遇している。それらの障壁を次々と乗り越え、改善への変貌を遂げながらの進展である。将来的には、学校における必須の授業になることが視野にある。知的側面一辺倒とも言える学校教育に革新をもたらす、教育には何が必要なのかを根本的に問いかける活動が続く。

以下のWebsiteにセンターの活動が克明に紹介されているので参照されたい。

<http://www.naruto-u.ac.jp/center/prevention/>

予防教育科学教育研究センター構成図

